

町医者だより

<発行・お問合せ先>

おおわだ内科呼吸器内科

院長 大和田 明彦

市川市南八幡4-7-13

シャポール本八幡2階

JR本八幡駅南口(シャポール改札口)

2分ミスタードーナツ並び

ヘアサロンAsh向かいビル2階

電話 047-379-6661

おおわだ
内科
呼吸器内科

令和05年11月号

フェンタニル中毒

大麻と聞くと一般の方は、エー、となりますが、カンナビノイドと言う英語になると、何も感じないのではないのでしょうか？日本には、古来から神様がいらっしゃる山や森を神奈備と書いて[かんなび]と言うので、異質な感じを受けないのかも知れません。今回は大麻、ヘロインに代わる第三の波と言われる合成麻薬のフェンタニル中毒の話です。

日本では、製薬会社のヤンセンファーマがデュロテップと言う貼り薬で販売し現在ではそのジェネリックである、フェンタニルテープを複数の会社が販売しています。舌下錠や注射剤もあるようです。以前は、癌患者さんの痛み止めとしてしか処方出来なかったのではないかと思います。今では癌以外の慢性疼痛にも使用できて、処方対象の間口が広がっています。鎮痛効果は強くモルヒネの100倍の強さと言われています。麻薬としての強さはヘロインの50倍です。致死量は2mgで他の麻薬と異なり、あまりに微量なため、粉末状では鉛筆の先端より小さい程度でしかありません。そのため見た目で致死量とは認識できず、拮抗剤(中和剤)のナロキソンが大量に必要で過量摂取後何回も繰り返しナロキソンを使用しなければならない状況が続きます。

フェンタニル過量摂取で胸郭の筋肉が木のように硬直し、木でできた胸症候群("wooden chest syndrome")になるようです。先のデュロテップはテープ剤ですが、2.1mgから16.8mgまでの製品があって韓国の若者の中毒例の報告もあるようです(韓国でも麻薬汚染が広がっているそうです)。米国は、麻薬天国と呼ばれています。かのニューイングランド医学誌(NEJM)の症例検討でも、麻薬を娯楽薬剤recreational drugと称しその使用歴がありますか、と医者が当たり前のように患者に聞いていることから、米国はかなり病んだ国です。この10年あるいはそれ以上にわたり米国では、フェンタニルの過量摂取が問題になっているようです。2023年11月のNEJMにフェンタニル検出のための改良された簡易テストが使用できるようになった、との記事が出ていました。すでに他の麻薬使用を判定するキットも販売されています。日大アメフト部員の麻薬使用の実態を見ると日本も若者を中心に麻薬使用が増えているとの印象があり麻薬天国になりかねません。日本でも、麻薬判定キットの積極的な導入が入学時や入職時などに必要になってくるかも知れません。医療大麻を他国が解禁しているからという理由だけで解禁する前に、悪しき前例である米国の在り方を徹底的に検証すべきではないでしょうか。